

保育における心理臨床研修のあり方

～保育場面に生じる問題と対処の行方～

馬場 禮子 (東亜大学大学院)

青木紀久代 (お茶の水女子大学)

矢野由佳子 (東京成徳短期大学)

<要旨>

保育において難しさを感じる「気になる子ども」への関わりについて、①質問紙調査、②研修会、③観察の3つの視点により、実態を把握し、保育実践に役立つ援助を試みた。質問紙調査で把握された気になる子の概要を研修会でフィードバックし、参加者が気になると感じる子どもがどのような問題を抱えているのか、他園ではどのような子どもが気になると感じられているのか、どのような対処を行っているのか、などの情報を共有することができた。そして、質問紙調査で挙げられた子どもの日常場面を保育園で観察し、報告者が臨床心理学の視点から助言を行った。その結果、子どもは問題を訴える手段として「気になる行動」を示しており、何らかの背景事情があることがわかった。以上、全体的な把握の上に事例検討を重ねる保育研修により、参加者が気になる子どもの臨床像をグループ化し、対処のパターンを取り入れるといった、日常保育に活かされる研修を実践できたと思われた。

<キーワード>

気になる子ども、保育者研修、保育カウンセラー、臨床心理士、コンサルテーション

【はじめに】

保育者が日々の保育において、何らかの関わりの工夫や保育の見直しが必要と感じる園児がいる。筆者らは、このような子どもを「気になる子ども」と定義する。このような子どもたちへの対処について、臨床心理士が保育カウンセラーとして保育者からコンサルテーションを求められる機会が増えているが(馬場・青木, 2002)、スクールカウンセラーの制度に比して、公的な整備は立ち遅れているのが現状である。また臨床心理士を交えた保育者の研究会や研修会は多く見られるが、具体的な保育実践にそれらがどの程度活用されているかは疑問であるし、また講師がどの程度研修に訪れる保育者が直面している問題を把握しているかについても、漠然としているという問題がある。研修会は、ともするとその場限りの啓蒙活動になりかねない。

報告者らは常々このような問題を感じつつ、各所で保育者研修の依頼に応じてきた。そこで本実践では、研修会での収穫が、日々の保育実践により直接的に還元されるようなプランを模索した。

まず研修会に先立って、保育者が問題を感じる子どもたちの実態と保育者の困難さを広く把握する。さらに、そこであげられた気になる子どもたちに対する、各園での試みや変化についても、年間の研修会と並行して調査する。これらの結果を参加者と逐次共有していくことによって、参加者が、実際の保育現場で抱える「気になる子どもたち」についての共通点や差異点を見出しつつ、問題の改善に向けてのヒントを持ち帰ちかえる機会が増すよう配慮した。

【実践の概要】

東京都H市及び山口県の保育園協会との協賛により、報告者と共に平成13年度研修を巡ってなされた実践の概要は、以下のとおりである。

1. **質問紙調査** 各々の協会主催の研修会に参加する園を含む、同地区の計411園に「保育における気になる子ども」の存在の有無と、その子どもの臨床像について、質問紙調査を行った。実施は、平成13年7月と、同年11月の2回であり、同一項目で再評価してもらい、その変化を検討した。結果は、毎回直ちにフィードバックされ、研修会の参加者が、参加園の実態を把握できるようにした。

2. **研修会** 報告者が助言者となって、保育者との共同研究会を開催し、事例検討を通して助言を行なった。開催頻度は月1回、参加者は6園12名であり、そのうち2園は毎回交代することによって、より多くの園が参加できるようにしている。提出事例は1回2-3例で、先の質問紙で提出されている「気になる子」の事例である。討議の内容は子どもの実際の言動の特徴、保育者の関わり方、家族の状況と子どもへの関わり方、などについて報告者から聞くとともに参加者間で討議した。助言者は臨床心理の立場からの子どもの見立てを述べ、また家族への対応の仕方や保育者の関わり方について助言した。

3. **観察** 質問紙調査で「気になる子」を挙げた二つの保育園において、該当する計5人の子どもについて、保育場面での観察を行なった。頻度は、一人につき週1回、約1時間、計5回、方法はビデオ収録で、後に保育者が挙げる「気になる行動」が生じる前後の状況を抜粋して詳しく観察した。この観察から、保育者の語りによる問題状況の把握が主となるコンサルテーションにおいて、コンサルタントが留意すべき事

項を検討した。

【結果及び考察】

以下に、それぞれの活動から得られた結果を示す。初めに質問紙調査によってとらえられた、気になる子たちの実態と、その後の変化を示す。次に、実際の観察を行った園での主な特徴をあげる。最後に、研修会の中で筆者らがコンサルテーションを行い、改善した気になる子どもの事例を紹介する。

気になる子どもの実態とその後の変化

1. **性別と年齢** 性別では男子564名、女子241名、不明37名と男子が多かった($\chi^2(1)=49.69$, $p<.001$)。しかし、地域による有意差が認められ($\chi^2(1)=7.17$, $p<.001$)、男子に気になる子どもが多いと断定することはできない。年齢では1-2歳児が164名、3-5歳児が675名と3-5歳児が多く($\chi^2(1)=13.02$, $p<.001$)、地域による有意差は認められなかった($\chi^2(1)=1.46$, n. s.)。以上、保育者から挙げられる気になる子どもの特徴として、3-5歳の幼児が多く、性別では男子が多い傾向がわかった。第2回は第1回で回答のあった子どものうち723名について回答があった。(回収率85.9%)

表1 基礎データの比較 (人数)

| | 性別 | | | 年齢 | | |
|----|-----|-----|-----|------|------|-----|
| | 男子 | 女子 | 計 | 0-2歳 | 3-6歳 | 計 |
| H市 | 71 | 15 | 86 | 23 | 69 | 91 |
| 山口 | 493 | 226 | 719 | 141 | 606 | 747 |
| 計 | 564 | 241 | 805 | 164 | 675 | 838 |

2. **因子分析** 第1回の調査で得られた回答から、気になる様子の分類を行った。質問項目の類似性があらかじめ予測されたため、プロマックス回転による因子分析を採用した。「認知行動発達の進度」、「注意・衝動の統制」、「対人

関係」、「家庭環境」の4因子が抽出された(表2)。Cronbachの信頼性係数は各因子、全体共に高い値を示し、内の一貫性が十分であると判断された。なお、因子との結びつきが弱かった項目は削除した。第2回の調査を再度因子分析により解析した結果、第1回と同じ4因子構造が得られ、共通性も高まった。以上、①発達や言葉の遅れ

が障害なのか判別に迷う、②乱暴な言動が多く集団場面で落ち着かない、③対人緊張や分離不安など対人関係で気になる様子が見受けられる、④親子関係が気になり、保育園と家庭との連携でも困難を感じている、という4つの視点から、保育者が捉える「気になる子ども」について考察されることが示された。

表2 「気になる様子」のプロマックス回転後の因子負荷量

| 項目 | I | II | III | IV | 共通性 | |
|---|-----|-------|-------|-------|------|-------|
| 因子 I (認知行動発達の進捗) | | | | | | |
| 5 会話のやりとりができない。 | .84 | | .25 | | .72 | |
| 3 こちらの言うことは理解しているようだが、言葉でうまく表現できない。 | .83 | | .18 | | .70 | |
| 1 言葉の発達が遅い。 | .80 | | | | .67 | |
| 2 こちらの言うことをどうも分からないようだ。 | .76 | .26 | | | .62 | |
| 4 こちらからの話しかけや問いかけを反復して言う。 | .75 | .14 | .24 | | .57 | |
| 7 手先が不器用で、ハサミや箸の使い方が下手である。 | .66 | .24 | .20 | | .45 | |
| 8 身辺自立が遅い。(例;排泄や衣類の着脱が月齢相応にできない。) | .63 | .17 | .27 | | .41 | |
| 10 視線が合いにくい。 | .57 | .42 | .35 | | .46 | |
| 6 ひとりてくるくる回ったり、手をひらひらさせたりする。 | .48 | .35 | .22 | | .32 | |
| 因子 II (注意・衝動の統制) | | | | | | |
| 20 ルール(規則)や大人の指示に従わないことが多い。 | .15 | .83 | | .26 | .70 | |
| 21 じっとしていることができず、動き回ることが多い。 | .20 | .78 | -.12 | .18 | .67 | |
| 19 気が散りやすく、集中することが難しい。 | .24 | .75 | | .20 | .60 | |
| 16 他児といざこざを起こして、うまく遊べない。 | | .73 | .18 | .33 | .56 | |
| 18 聞き分けがなく、かんしゃく・パニックが多くてなかなか次の活動に移れない。 | | .68 | .27 | .22 | .51 | |
| 22 被害者意識が強い。(例;些細なことで大げさに泣く。) | | .51 | .37 | .30 | .40 | |
| 因子 III (対人関係) | | | | | | |
| 13 保育士や大人とはよく話すが、子どもとは緊張して話せない。 | .44 | | .70 | | .58 | |
| 15 表情が乏しい。 | .32 | | .69 | | .53 | |
| 14 保育士や大人の様子を過剰にうかがう。 | | | .67 | .25 | .53 | |
| 12 分離不安が強く、母親(あるいは主な養育者)から離れられない。 | | .13 | .65 | | .44 | |
| 11 ひとり遊びが多く、他児と遊べない。 | .48 | .26 | .56 | 1.12 | .50 | |
| 25 親が干渉的である。 | .11 | .12 | .49 | .31 | .30 | |
| 因子 IV (家庭環境) | | | | | | |
| 26 家庭(親)との連絡がうまくとれない。 | .11 | .24 | .20 | .82 | .70 | |
| 24 親が子どもの様子について無関心である。 | | .40 | | .77 | .66 | |
| 27 親子関係で気になることがある。 | | .30 | .25 | .76 | .61 | |
| 第1回 | 二乗和 | 5.48 | 3.51 | 2.41 | 1.42 | 12.82 |
| 寄与率(%) | | 24.34 | 14.62 | 10.06 | 5.94 | 54.96 |
| Cronbach's α | | .85 | .88 | .82 | .72 | .87 |
| 第2回 | 二乗和 | 7.41 | 3.15 | 1.88 | 1.44 | 13.88 |
| 寄与率(%) | | 30.90 | 13.14 | 7.82 | 5.98 | 57.84 |
| Cronbach's α | | .89 | .86 | .73 | .78 | .90 |
| 因子抽出法: 主成分分析 回転法: プロマックス法 | | | | | | |
| 削除した項目 | | | | | | |
| 9 限られた好きなものに固執する。 | | | | | | |
| 17 自傷行為が見られる。(例;自分の頭を床にごんごんとぶつけている。) | | | | | | |
| 23 人に誉めてもらったり、認めてもらいたがる。 | | | | | | |

3. 事例の分布 因子分析の結果をもとに、全事例について因子ごとの平均得点を算出し、平均得点が3点より高い因子をその事例の特徴と捉え、事例の分布を見た(表3)。カッティングポイントを3点としたのは、気になる子どもであることが前提として回答された中で、3点以上というのは実態としても意味があると考えたためである。1因子のみで高得点を示した事例の分布を見ると、「注意・衝動の統制」にあてはまる回答が127事例と最も多く、次いで認知行動発達の進度(55事例)、対人関係(34事例)、家庭環境(25事例)であった。2回の推移を見ると、「認知行動発達の進度」と「注意・衝動の統制」では大きな変化が認められなかった(順に $\chi^2(1)=2.43, n.s.$, $\chi^2(1)=0.15, n.s.$)。一方、「対人関係」では減少が認められ($\chi^2(1)=10.03, p<.001$)、「家庭環境」では増加が認められた($\chi^2(1)=9.65, p<.001$)。また、4因子の複数が高得点を示した重複的な事例は減少し($\chi^2(1)=20.15, p<.001$)、いずれの因子も3点以上にならなかった低得点の事例は増加した($\chi^2(1)=38.74, p<.001$)。このことから、発達の遅れや障害が憂慮される事例と、衝動性の統制に関する事例は、数として変化が認められなかった、すなわち子どもの気になる様子として継続的に取り上げられる可能性が高い問題と考えられる。一方、家庭環境に関する問題は第2回で有意に増加していることから、次第に気になってくる特徴と考えられる。重複した事例が減少し、低得点の事例が増加したことから、重複していた事例も時期を追うごとに問題が明確化してきたり、問題が改善されている可能性が考えられる。ただし、第1回の内容に対する第2回の変化という視点で考えると、例えば第1回では衝動性が気になっていたけれども後に発達の問題が考えられるようになった、など問題の内容が変動している事例も十分あると考えられる。また、低得点の事例には、後の観察で見られた、保育者側の敏

感さが反映されている、気になる行動が顕著ではない事例も含まれていると考えられる

表3 実施回×事例数のクロス表

| | 第1回 | 第2回 | |
|-----------|-----|-----|------|
| 認知行動発達の進度 | 55 | 34 | n.s. |
| 注意・衝動の統制 | 127 | 104 | n.s. |
| 対人関係 | 34 | 10 | ** |
| 家庭環境 | 25 | 45 | ** |
| 重複 | 458 | 311 | ** |
| 低得点 | 143 | 219 | ** |
| 合計 | 842 | 723 | |

**= $p<.001$

4. 実施回による因子得点の変化 各因子の平均得点について、実施回による変化を見た(表4)。対応のあるt検定を行ったところ、「認知行動の発達」「注意・衝動の統制」「対人関係」において有意に得点が下がった(順に $t(606)=5.19, p<.001$, $t(673)=5.77, p<.001$, $t(680)=6.38, p<.001$)。一方、「家庭環境」では有意差が認められなかった($t(681)=.51, n.s.$)。全般的に気になる度合いは低下していることが示された一方で、家庭環境に関する問題は変化が捉えられにくい側面として考えることができる。この背景には、家庭環境が後から気になってきた、という結果3のような変化が考えられる。つまり、家庭の状況は、最初から問題の中心としては捉えられにくい側面であると考えられる。

表4 実施回ごとの各因子の平均値(標準偏差)

| | 1回目 | 2回目 | |
|-----------|-------------|-------------|------|
| 認知行動発達の進度 | 2.74 (1.05) | 2.44 (1.03) | ** |
| 注意・衝動の統制 | 3.25 (1.04) | 2.91 (1.08) | ** |
| 対人関係 | 2.39 (.92) | 2.09 (.84) | ** |
| 家庭環境 | 2.36 (1.18) | 2.33 (1.19) | n.s. |

**= $p<.001$

5. 対処得点 対処に関する項目の平均値を算出した(表5)。「気になる子どもと個別に関わる時間を増やした」「連絡ノートなどを使い、園と家庭での様子について情報交換を行った」という項目でやや得点が高かった。「気になる子ども

表5 対処に関する項目の平均値(標準偏差)

| | |
|-----------------------------------|-------------|
| 1気になる子どもと個別に関わる時間を増やした。 | 3.91 (1.05) |
| 2気になる行動を改善するためのプログラムを作った。 | 2.45 (1.14) |
| 3気になる子どもに重点的に関わる担当者を配置した。 | 2.27 (1.21) |
| 4園内で事例検討会などを開き、問題について複数で検討した。 | 2.89 (1.31) |
| 5他の専門家に相談をした。 | 2.23 (1.31) |
| 6子ども又は親が、専門機関にかかるようになった。 | 2.16 (1.31) |
| 7家族との個別面談を行った。 | 2.67 (1.42) |
| 8連絡ノートなどを使い、園と家庭での様子について情報交換を行った。 | 3.21 (1.48) |
| 9家庭訪問を行った。 | 1.89 (1.06) |
| 10園と家庭で気になる問題を共有した。 | 3.24 (1.33) |

と個別に関わる時間を増やした」という対処は、以前に実施した同様の調査(矢野・青木, 2002)でも高得点を得られていることから、気になる子どもへの対処の共通点であると言える。一方「家庭訪問を行った」という対処は得点が低く、対処としてなされにくかったことがわかった。これも前回の調査と同様の結果であり、保育所という特性による現実的な難しさが反映されていると考えられる。

地域差を検討するために、対応のない t 検定を行った結果、有意差が認められず($t(676) = -0.851, n.s.$)、地域による対処の違いはなかった。全項目での信頼性係数は高く(Cronbach's $\alpha = .85$)、内的一貫性が十分であると判断された。

6. 研修会でのフィードバック

質問紙調査からわかったことを、質問紙回収後の研修会でフィードバックした。気になる様子が発達の進捗、注意・衝動の統制、対人関係、家庭環境の4点から捉えられているとわかったことから、子どもの問題の質に応じたグループ分けが可能になり、グループでの討論により同様の問題の子どもを抱える保育者同士での共有ができた。自分たちが答えた内容について直ちにフィードバックを受けることにより、その地域の実態を把握し、共有することができた。気になる子どもの対応に困っている保育者にとって、自分だけが困っているのではないということが実感でき、研修会で質問紙を併用することの有用性が確かめられた。

観察された子どもの様子と保育者との関わり

おもな観察の結果を纏めると：気性の激しさ、情緒の不安定さ、行動の唐突さなど、保育者が挙げた特徴を顕著に頻繁に示す子どももあった。しかし、そうした特徴を殆どあるいはまったく示さない子どももあり、保育者側の敏感さが推測される場合もあった。

また「気になる行動」が生じる状況を見ると、必ず何らかの背景事情があり、言語での自己表現の乏しい子どもが周囲に問題を訴える手段(サイン)として「気になる行動」を示していることが分かった。ここから、周囲の大人がそのサインにより早く対応できることが、「気になる行動」の改善につながるであろうと思われた。実際にも、行動が現われた時に保育者がただちにその意味を汲み取って適切に対応すると(たとえば情緒不安定な子供が不安な状況で大声を上げた時に保育者がすぐに抱きしめて話しかけたり、玩具を取られて顔色を変えた子供にすぐに代わりの玩具を与えたりすると)、問題行動が逸早く消失することが観察された。一方、こうした対応がなされない、初めは我慢して、嫌われる行動をしまいとしている子供が、次第に耐えられなくなって、ついに「気になる行動」を起こすプロセスも観察された。この際、子供が一定時間耐えている状況は保育者には気付かれていない。

保育者のよりよい保育をしたいという関心は高く、経験則に基づいて試行錯誤しながら、適切な助言を求めているという意見も聞かれた。二つの保育園は、広さ、人数などにかなりの差があり、園児が順調に成長するためには、一定の広

さと限られた人数という物理的条件も必要であろうと思われる。このような問題は、通常の事例検討の際、十分な資料が得られない現状があり、コンサルテーションのポイントとして、重要であろう。

事例報告

事例 N 男子 平成8年8月生まれ 検討1回目は5歳4ヵ月、2回目は5歳10ヵ月

<第1回検討会>

気になる様子； 暴力と暴言

遊んでいて自分の思い通りにならないと相手に噛みついたり引っ掻いたりする。保育者に注意されると傍にいる子どもに八つ当たりしたり、保育者に「ばか」「あっちへ行け」など暴言を吐いたり暴れたり、または泣くことで押し通そうとするので、注意するのが難しいし、効果がない。感情の起伏が激しく、仲良く遊んでいる相手に忽ち叩いたり噛みついたり暴言を吐いたりする。

家庭の状況； 母子二人きりの家庭

父親21歳、母親20歳の時に出生したが、当保育園に入園してきた時(11ヵ月)にはすでに両親が別れ、母子家庭になっていた。母親は日中勤務の仕事だが、保育園への迎えは18時半を過ぎる。週1回は早朝出勤で7時前に登園する。母親にも「ばか」というし、母親は厳しくしていると言うが、本人はまったく気にしていない様子で、保育者に対するのと同じく要求を通す態度を取っている。

発達の程度； 特に問題なし。身辺自立はできている。しかし少しでも気分を害すると「～できん」と泣いて駄々をこねる。言語はよく発達しており、はっきりと話す。家での様子について詳しく話す。自分の意思をはっきり言う。絵本やビデオは好きで、集中して見ることがで

き、内容もよく理解している。

保育者の対応； 叱ったり褒めたり、試行錯誤している。暴力は叱るが、ひどく叱ると激しく泣き叫んで手がつけられなくなるし、褒めると調子に乗る。やさしく接するようにしたところ、その場は収まるようになったが、何をしても許されると勘違いしたらしく、わがママがひどくなってきた。このようなことで対応に困っている。時々は手を繋いだり、だっこしたりもしている。

臨床心理士の助言； 以上の説明から、この子どもは知的にも身体的にもよく発達しており、能力発達の面では問題がないと推測した。また問題の特徴が、要求を通そうとすること、通らないという事態が理解できないらしいこと、つまり能力的に発達している割には情緒面と対人関係面の発達が遅れており、保育者にも愛着が乏しく、道具的に利用する傾向が強いと推測して、ここからさらに、問題は本児が幼児的万能感を解決できていないことにあると推測した。

そこから助言者は、幼児的万能感の現われと、そこから生じる問題について解説し、それを解消させる働きかけについて助言した。すなわち、玩具や遊具はみんなのものであって独占はできないこと、保育者への要求も通ることと通らないことがあること、順番を待たなければならない時もあることなど、思い通りにならないことがあることを教えるように、また万能感を捨てるのは本人にとって難しい辛いことなので、教えるときにはその辛さを受け入れながら優しく言って聞かせるように、という助言であった。

<第2回検討会>

保育者の対応の変化と子どもの変化； 激しく泣いて要求を通そうとしたり、友達を叩いたりする時には、その都度、待つことや譲ることの大切さを話して聞かせた。それができた時には褒めた。それでもなかなか変化しなかったが、徐々に暴力が減り、現在ではほとんど暴力は見られなくなっ

た。本児が怒っている時には絶対に怒り返さないように気をつけた。怒っている本児の話をよく聞いて、納得するまで話すようにしたところ、次第に素直に受け入れるようになった。全体的に本児の気持ちが安定していることが多くなり、かんしゃくを起こすことはなくなった。集中して遊びに取り組むようになり、友達にも優しくなり、保育者にも自然な甘えを示すようになった。

家庭での対応の変化； 母親は以前は激しく叱りつけていたが、子どもが安定してくるにつれて、子どもを可愛いと感じられるようになったと、母親から報告されている。子どもは、母親と同棲している男性を「父さん」と呼ぶようになり、3人で旅行したり、テレビゲームをしたりすることを、楽しそうに保育者に話している。

助言者の所見； 保育者の努力は以前から変わらないが、対応の仕方が変わったことでその努力が報いられるようになった。保育者の対応は叱るか褒めるか、の選択になりがちであり、「優しく言って聞かせながら、譲らずに教える」ことは難しいと思われる。また、万能感の解消という観点を知ったことで、保育者の対応が的確になったと思われ、このような臨床心理学の知識と、具体的な関わり方への助言が、保育に役立つことが分かる。

また、たとえ問題の根拠は家庭の母子関係にあったとしても、保育者がその問題を解決することは可能であり、それによって母子関係自体も改善しうることが分かり、これは保育者や保育園という育児環境の意義を証明することと言える。

【まとめ】

保育研修において最も強く求められるものの一つが、具体的に、すぐに保育に活かせるア

ドバイスである。一般的な発達に関する知識を伝達するよりも、もっと個別的な対処について聴きたい、というニーズは常にある。研修会の形式に事例検討会が多く望まれるのは、そのような事情を反映しているといえるだろう。しかし、事例提供者だけが研修会の恩恵を受ける、あるいは、似たようなケースが続いて提出され、気になる子どもの全容になかなか届かない、というような問題がある。今回のように全体的な把握の上に事例検討を重ねることは、参加者が気になる子どもの臨床像をグループ化して、効率よく対処のパターンを取り入れることにある程度貢献できたと考えている。

さらに保育者からの相談は、臨床心理士が直接保育現場に赴かずに行う場合も多い。保育者の語りと実際とのずれ、あるいは語られないことの多い部分などについて、観察資料の活用の重要性を示唆する結果となった。より多くの臨床心理士が、もっと実践的かつ基礎的な知識を蓄積することが望まれる。今後、子育て支援を行う臨床心理士の再教育に生かしていきたい。

【実践の経過と今後の予定】

今年度も、研修会は継続して開催されている。昨年度の研修会で検討した事例の追跡調査は、今年6月から12月に亘って、提出から半年以上経っている事例毎に再度提出し、その後の変化を見るという方法で検討する予定である。

【文献】

- 八王子私立保育園協会 2001 平成11・12年度
障害児等保育研究委員会報告書 「気になる子の保育について」
馬場禮子・青木紀久代 2002 保育に生かす心理
臨床 ミネルヴァ書房
矢野由佳子・青木紀久代 2002 保育における
「気になる子どもたち」－多数園の実態の共有
とその対処－. 児童育成研究第20巻 (印刷中)